

## 国内最多の会員830名！今なぜ横浜市鶴見川でローイングなのか。

－伝統スポーツによる健康増進、人間育成、幸福追求の先端実例－

沼田金之（パワーズローイングクラブ）

序：鶴見川とローイング：

2010(平成22)年7月29日国土交通省が発表した「平成21年全国一級河川の水質現況」で、今回も横浜市の一級河川「鶴見川」は全国河川・水質ワースト5であった。残念ながら鶴見川はワーストランクの常連であるが、その一方、河岸に「横浜市立鶴見川漕艇場」が存在していることはほとんど知られていない。鶴見川漕艇場は1988(平成元)年横浜市鶴見区の北部第一水再生センター(下水処理場)敷地内に、国内初の生涯ローイング施設として開所された。川幅が適当で流れも緩やか。水上オートバイやウェイクボードなどが入ってこないことから主に中高齢者が土日祝日に訪れている。その利用者数は2009(平成21)年度は21,000名にのぼり、平均年齢は60歳代半ば、最少齢は4歳で最高齢は86歳である。

1. 「パワーズローイングクラブ」(社会人ローイング団体)とは：

「パワーズローイングクラブ(以下、パワーズ)」は毎週土曜日主に20歳代若手から50歳代中年族までの20名強が入れ替わり立ち代わり集合し、その鶴見川でボートを漕いでいる。高校、大学でまったくローイングをやっていない未経験者も大勢おり、皆で楽しく元気にオールを握り、気持ちのいい汗を流している。

パワーズの会員数は2010(平成22)年9月末現在830名強にのぼる。マイナー競技といわれるローイングに一度触れた人間がハマっていくのはなぜか。パワーズになぜ人が集まり、その中で何を学び、何を考え、そして今後どのように発展させようとしているのか。ここでは、より多くの人たちの余暇充実、すなわち「健康増進」「人間育成」「幸福追求」にどのように寄与していこうとしているのかなどについて述べる。

2. ローイングとの出会い：

小生は学生ローイング経験者ではない。父方祖父は柔道の師範。父は水・陸とものスポーツ万能選手。母の教育方針は「男の子は雨の日以外は外で遊べ。けんかに負けるな」だった。「勉強しろ」といわれたことはなく、幼い頃からスポーツに勤しんだ。脚が速かったので陸上競技関係の表彰状は数知れない。また野球では小学6年で杉並区準優勝(東京都)、中学では4番サードで鳴らし試合には滅法強かった。ただ高校では既成の運動部に飽き足らず「なんでも同好会」なるものを結成、体育会的団体と一線を隔した。大学1年で父が他界すると、学費稼ぎ・家計助けに精を出し、学校へは余り行かず、当然運動もしなかった。

1979(昭和54)年卒業後は三井物産株式会社に入社した。ここでひょんなことから「競技ボート(ローイング)が漕げるぞ」との同期の声に促され、タダ酒タダ飯に誘われ埼玉県戸田市にある「戸田漕艇場」に足を運び「三井物産漕艇部」へ入部した。週に4日間合宿のまさに体育会生活。忘れていた郷愁に浸ったのか、どんどんのめり込んでいった。

3. 漕艇部改革を機に組織マネジメントを考える：

入社3年目の最後にキャプテンを務め、組織についても考えるようになっていった。あまり風通しの良くなかった現役・OB(長老含め)間の融合を目的に再構築をはかり、艇庫確保と新人勧誘という2大問題の解決および漕艇部再興に発起人として積極的に立ち上がった。

ローイングは皆に馴染みがない。よってスタートは一緒。さらに特定の誰かが良くてもだめで、皆と一緒に同じ動きをする。すなわち気持ちの統一、ハーモニー・チームワークの醸成という人間育成に大変有効な経験がローイングから得られることに気がついた。小生は漕艇部に「社外有志」という枠を設けて、積極的に社内外、職業、年齢、性別、国籍、経験の有無問わず取引先から、友人、知人、さらにその紹介者までどんどん誘っていった。

#### 4. パワーズの立ち上げ：

1984(昭和59)年社外有志をどんどん募り集めていくと同時に「自分たちもまたしっかり漕ぎ始めよう」とかつての仲間たちを集め出したのがパワーズの原型だろう。1996(平成8)－1998(平成10)年には練習も本格的になり、社外有志も充実、レースでは結果も出始め、国内外(1997(平成9)年兵庫県城崎、1998(平成10)年北海道札幌、1998(平成11)年韓国ソウル)へ遠征旅行(遠漕)にも行き始めた。

当時は戸田を拠点に漕いでおり、「三井物産OBクルーパーワーズ」という名で艇など設備・施設も三井物産漕艇部に依存していた。ちょうどこの頃から日本ローイング界は8人漕ぎ「エイト艇」よりも、1人漕ぎや2人漕ぎの小艇種目が盛んになり始めた。それにともなって戸田漕艇場は混雑が目立つようになり、小生は他に漕ぐ場所を求め歩き、鶴見川漕艇場を探し当てた。

1997(平成9)年から鶴見川漕艇場でのレクリエーション大会「横浜市民ボートレース」にも出場するようになった。小生が3度目の海外駐在(一部国内赴任)(1999(平成11)－2004(平成16)年)に出た頃、戸田漕艇場の混雑はピークになり、仲間たちは本格的に鶴見川漕艇場へ拠点を移し、艇など設備・施設はそのものを借りて行うことになった。

そして2004(平成16)年帰国後「パワーズ」として三井物産漕艇部とはたもとを分かち、独自の道を歩み始めた。しかし小生が日本にいない間に会員数は激減。しかたなく、2004(平成16)年8月－10月の3ヶ月間は同僚と毎週末2人漕ぎの小艇を漕いだ。11月からはせめて月の最終土曜日には4人漕ぎ「ナックルフォア艇」に乗れるようにと、かつての先輩、同僚、後輩など経験者をまずくどき落とし、その上で徹底的に新人の勧誘に乗り出した。

#### 5. パワーズの現状：

とにかく人を見たら誘う。ローイングは人がいなくてはできない。また練習しなくては漕げない。よって、どんどん誘い、教え、漕げる人間を作っていった。職業、年齢、性別、国籍、ローイング経験の有無などにまったくこだわらず集め続けた。結果、会員数は2007(平成19)年末には120名になり、その後2008(平成20)年末350名、2009(平成21)年末640名、そして2010(平成22)年9月末現在830名強(年齢8歳から86歳、国籍12ヶ国)にまでなった。

レクリエーション大会には鶴見川でのレースのほか、近郊の宮ヶ瀬湖、2008(平成20)年より始まった「全日本マスターズレガッタ」にも積極的に参加し、初心者登竜門「多摩川」および「お台場」での大会にも出場している。また日本各地への遠征旅行(遠漕)も毎年恒例とし、出向いた折は地域のローイングクラブと積極的に交流・交歓に努めている。

さらに横浜ドラゴンボートレースなどの他のレクリエーション大会に参加したり、スキ

一合宿、小登山・ハイキング、都内および近郊を40km歩く「歩け歩け大会」等を独自に企画・運営・実行したり、さまざまな所属やスポーツ競技経験者を一同に会しての花見バーベキュー大会や大忘年会なども行っている。

このように、身体にいい、組織力を高める、新人勧誘に役立つイベントをどしどし行い、応援だけの陸パワーズ会員、漕がないが他イベント専門に参加するイベント会員、報告だけを受け取る通信会員なども大勢受け入れている。2009(平成21)年のべ参加人数は1,085名、2010(平成22)年は1,700名になる見込みである。

#### 6. パワーズの運営：

この運営は代表の小生を軸に、3名のマネージャー(連絡案内、練習報告感想など回収、出欠整理)、3名のマネージャー補佐(調査、調整、名簿)、さらにイベント毎に指名した幹事で運営している。会費はなく、都度コスト頭割りで行っている。

鶴見川漕艇場での通常練習は土曜日午前の約2時間、4人漕ぎ「ナックルフォア艇」での乗艇が主体。基本的には漕力平均にてクルーを分け、クルーキャプテンを指名し安全対策を万全にやってもらう。練習参加者人数を常に予測し、向こう3ヶ月先まで艇を予約している。会員には1ヶ月の参加予定を聞き、さらに週次で再確認している。こうした管理はすべて数値で行っており、KPI(Key Performance Indicator、重要経営指標)を設けることで、過年度対比など傾向分析も行っている。

現在一番の懸案事項は安全対策・無事故の遂行である。漕艇後は陸上トレーニング(腹筋、背筋、スクワット)を行い、整理体操を終え、各自その日の練習コメントを述べて終了。帰りに都合のつく人で毎週同じJR鶴見駅前の中華料理店(その店の長、店員もまたシンパ会員)で一杯やりながら懇親・懇談する。翌週月曜日までにクルー毎に指名された担当者がクルーレポートをならびに全員が感想文を提出する。その週内に小生は前文を書き練習報告として会員すべてにeメール(一部ファックス)にて配信する。各イベントもすべて参加者全員に感想文を提出してもらっている。この週次配信の全員感想文は、参加できなかった者へ次回以降の参加意欲を大いにかき立てており、国内外遠隔地にいる会員の孤立や退会を回避する秘訣にもなっている。

レクリエーション大会や各種イベント含めた年間スケジュールは前年12月には決定し、大忘年会時に配る1年間の活動報告(記録&写真集)に付けて連絡している。各イベントへの参加不参加はまったく各人の自由。前年12月に年間スケジュールを通知するため「先約があり欠席する」という言い訳は効かない。イベント含めた参加費は前払い。当日の幹事の手間を省き、不測の事態回避など安全性も高めている。参加者には都度会計報告をし、端数金はクラブ運営予備費として工具などの備品購入に当てる。また反省会も毎回行い、次回幹事へ引き継いでいる。

こうした運営を皆できっちり回していくことで、若者に社会常識を植え付け、また中堅には次世代リーダーとしての自覚を促している。レクリエーションでも、口先だけでなく、実践する姿を見せることが、人間育成に大変良い効果を与えていると考える。

#### 7. パワーズから学んだこと、考えたこと：

当然ながら人事権、考査権、給与決定権のない組織で、小生の方針、マネージャー陣の指示、幹事の連絡でどうして人が動くのだろう。いろいろ考えてみた。

- ①まずローイングのおもしろさの発見だろう。ローイングというスポーツは、会社や学校にボート部がある、水辺に近いなどの条件が合わないとなかなか接触できない。たまに川で気持ちよく漕いでいるのを見かけても、さっさと行ってしまい、万一艇庫を見つけても見ず知らずの者は近づきにくい。やっている人間も今まで積極的に初心者を受け入れてきたとはいい難い。ところがこれがやってみると、皆で力を合わせることの素晴らしさと全身運動の気持ちよさで「とりこ」になる人が大勢出てくる。
- ②次にそうさせるパワーズの雰囲気があるようだ。入りやすい環境、明確な運営方針、いい仲間たちにあるようだ。さらに運営のやり方が自然に参画意識、帰属意識を持たせているのかもしれない。そしていまや人が人を呼ぶパワーズになっている。

#### 8. パワーズの今後の発展、その方向性：

パワーズは各地に遠征旅行(遠漕)し、その地のローイングクラブと交流・交歓しているが、その際我々の活動の主旨に賛同してもらえればシンパ会員になってもらっている。我々の会員がその地に転勤すれば彼らのクラブで漕がせてもらい、彼らが当地に来ればこちらで引き受ける。要は漕ぎたい人が漕げないで過ごす週末を日本全国なくしたいと考えている。よって全国各地で会員がどんどん増えている。いずれ海外との間でも同じようにできればと思っている。

現在会員皆が感じていることは、パワーズでの活動が健康増進、ストレス解消、リズムある生活の確保に大変役立っているということ。中年以上は定年後に地域社会へ溶け込むまでのワンステージを獲得し、年金生活者はレクリエーション大会参加による適度な刺激の享受と生涯現役の自負・確信を得ているようで、外国人には日本理解・日本社会導入への一つのステップにもなっているようだ。

資源のない日本の唯一の財産は「人」といわれている。ただその「人」同士の結びつきが昨今とみに希薄になってきている気がする。パワーズの活動を通して見え隠れするのは、皆何か寂しく、何か求めているのではないかということ。我々が20歳代の頃、50歳代の人間がやっているクラブに入ろうとはまったく思わなかった。まさにパワーズは、かつての“大きい子から小さい子までそろった「横丁の缶蹴り」”、“年長者が年少者に買物マナーを教えた「駄菓子屋コミュニケーション」”の役目を果たしているのではないかと思う。もしそうであれば、なおのこと、皆それぞれの余暇の憩いになってくれればと願っている。

#### 9. パワーズの目指すところ：

現在鶴見川漕艇場では、我々が練習を終了する頃から、今度は60歳代を中心とした大所帯(慶應義塾大端艇部OB会)がやってきて準備体操を始める。その生き生きとした表情は我々の明るい未来を示してくれているようで大変うれしくなる。また、昨今欧州で大型の手漕ぎ艇でローイング旅行を企画・実行し、楽しんでいるドイツ人と知り合った。さまざま国籍の人を集め、毎年異なった水域を1週間漕ぎながら移動する。彼らはこれを「ツアー・ローイング」と呼んでいる。「似たような考え方持っているね」とお互い意気投合し、今後交流を深めていくことになった。これぞローイングを通じた幸福、人生の醍醐味だ。パワーズは今後とも「最大多数の最高幸福」を目指し、さらにまい進していく所存である。ぜひ一度、パワーズをご覧いただき、一緒に気持ちいい汗を流しませんか。